

関わり合い、伝え合う児童の育成 ～考える力を育てる指導法の工夫～

学校名

墨田区立第一寺島小学校

所在地

〒131-0032
東京都墨田区東向島1-16-2ホームページ
アドレス<http://www.sumida.ed.jp/ichiterajimasho/index.html>

1. 研究の背景

学校教育の中でもICTを効果的に使用した学習場面の設定が、児童の学習効果の向上につながっているのではないかということが唱えられて久しい。しかし、本区や本校のICT整備や活用といった所を見ると残念ながら積極的な推進をしているとは言い難い。教員の採用が拡大し20代、30代の採用が増えている現在、その活用の範囲など推進は、機会さえあれば容易に広げることができると考えた。また、若手教員にとって、児童に分かる授業、分かりやすい指導を行うためには、ICTを幅広く、多くの教科に渡って活用することが必要であると考え。児童を取り巻く環境も、善か悪かの議論はさて置いたとしても、ICTにつながる機器、端末の活用が遊びの中で自然と行われている時代になっている。このような背景から、ICTの活用が児童の学習意欲の向上と、活用能力向上による自信、発表方法の工夫と行ったスキルの向上につながるのではないかという仮説を立てた。こうした背景から研究助成を希望した。

本校では、4年間「関わり合い、伝え合う児童の育成」というテーマで研究を進めてきた。しかし、実践の方法までには深く研究することができず、十分な効果を上げることができたとはいえない。児童の実態として、話し合い等の場面で、自身の思いを表出せず、豊かな交流を積極的に行えない児童が見受けられることが課題となっている。これは、自らの意見を否定されるのではないかという不安と、誤った考えではないかという自信のなさ、うまく思考を言語に結びつけられないスキルの不足によるものと考えられる。

そこで、改めて、研究テーマを見直し、児童同士が活発に意見や考えを言い合えるコミュニケーション能力として必要不可欠なのは、「考える力」の育成によるところが大きいと考えた。そこで、研究テーマを「考える力を育てる指導法の工夫」とし、新たな研究を進めることとした。自分の考えや学習物をICT活用によって投影し、多くの児童に伝えることで一人一人の考える力の育成を図り、コミュニケーション能力を身に付けることで、互いに伝え合える学習環境を用意できると考え、自分の考えや意見への自信、そこから、ICTを活用した発表スキルの向上が、児童のアサーティブな発表場面を保証するのではないだろうか。

2. 研究の目的

そこで、一つの解決策として、ICT環境を整備、充実させ、ICTを活用した児童の意見表出場面を数多く生み出すことができれば、発言に対する不安や自信のなさが緩和され、スキルも向上し、関わり合い、伝え合うことのできる児童を育成することができるのではと考え、本研究課題を設定した。実際の学習物を拡大したものや、考えを視覚的に分かりやすく投影することができれば、児童は、学習の

イメージをもちやすく、分かるという実感をもって取り組むことが出来る。また、児童の説明と学習物が同時になされる発表を行うことによって、他の児童にも伝わり、お互いに積極的に関わろうとする意志へとつながっていくのではないかと考えた。本研究では、児童が自らの思いや考えを表出するための考える力を育てることを目的としている。そこで、意見表出場で、「拡大投影機（みエルモン L-1ex）」で教材や児童の学習物を提示しながら発表することで、児童の発表スキルを高めていくこととした。

3. 研究の方法

研究の前提として、ICT活用に対する教員の苦手意識の払拭のために、適宜ICTリーダーという校務分掌を設置し、校内研修会を開くこととした。また、各月の研究授業において、必ず「拡大投影機」を活用した授業を行うように設定した。その際、以下のような視点によって授業構築を行った。

- (1) 考える力を育てるための発問や教材の開発。
- (2) 自分の意見や考えをまとめるための活動時間と小グループによる話し合い活動の時間の確保
- (3) まとめた内容を発表するための場面の工夫として、ICT を活用する。

① 拡大投影機（みエルモン L-1ex）

② デジタルビデオカメラの活用による記録

- (4) 授業実践後に、普段の授業に生かせるための研究協議会の設定

さらに、本研究が実際の授業で生かされるように、教員同士が活用方法の工夫を話し合い授業実践を重ねた。



4. 研究の内容・経過



年度当初、研究授業外ではあるものの算数科の授業の中で、学習物の投影が多いに効果的であるのではないかという意見が出され、特に低学年の場合には、実際のイメージがつかみやすい環境をできるだけ整える必要が確認された。特にノート指導の際には、活用される場面が多く存在した。

また、国語科の研究授業の中においては、上記の学習物の投影を積極的に行うことによって、ICTの活用が学習効果を上げることが確認されていった。

9月に行われた研究授業では、「拡大投影機」が効果的に行われる授業が実践され、児童同士が考えを発表し、またその考えから自分の考えにつなげていくという学び合う姿が見られた。そして10月の授業公開において、全学年がICTを活用した研究授業の公開日を設けることにより、一定の成果を地域や保護者の方に伝える機会とすることができた。

研究が進むにつれICTを使うことそのもので苦労していた教員も、効果的に使って授業を行うことを目標に授業構築を行えるようになっていった。

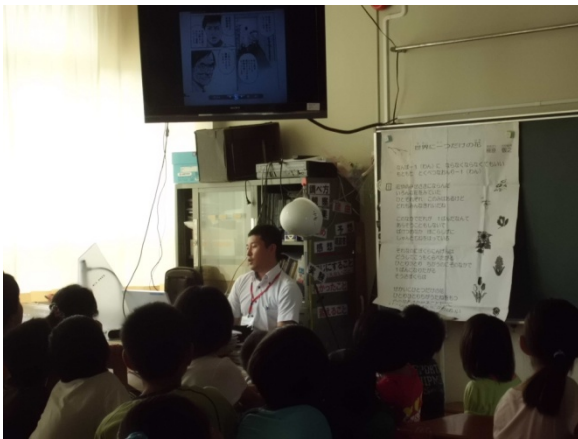
5. 研究の成果



上記と重複する部分もあるが、まず、教員側に、ICT活用に対する抵抗感が無くなり、使うことそのものよりも、学習効果を上げるための活用方法が議論されるようになったことである。そのことにより、自然と発表の場面が活発になり、盛んに授業の中で取り入れられるようになっていった。また、ICTリーダーの校内研修からそれぞれの教員が活用方法を工夫するようになっていったことも上げられる。

児童にとっては、自分の学習物が大きく取り上げられるという喜び、自分の意見が取り上げられることによる自信の獲得へとつながった。そして、児童から教師に対して、「その教材や学習物を拡大投影機で見せてほしい！」という声が上がったのも児童が発表などへ考え方を考えることができた現れであると考えられる。

6. 今後の課題・展望



環境作りの中で、どうしても座席の位置や、窓からの日光でディスプレイが見づらくなってしまう場面では、残念ながらこれから再考していかなければならない点である。また、今回の「拡大投影機」によるICT研究は、どうしても情報を一斉に送信するもの、すなわち教師主導の授業展開にならざるを得なかった。確かに分かりやすい授業を実践することはできた。

ただ、これから実社会に対して自分から積極的に関わり、何かしら自分で働きかけることができる人間になる一因とするためにも、それぞれの学習者が主体的に学びを促進し、それを即座に同期できるようなWiFi環境、クラウドシステムの整備、さらには学習者に対して一台のタブレット端末の活用が大きな役割を果たすと考えられる。もう実践を始めている学校もあるが、このICT環境が自然に教室に存在する環境の中で、それぞれの教員と児童が考え、考え合った内容を実践する授業を行うことが必要なのではないだろうか。

今回の研究は特に教科を決めずに実践をしたが、発表の場面での使用ということに関しては、どの教科でもまだまだ可能性が大いにあるものだと考える。逆説的に教科を限定しての研究は、活用方法を精選し、その使用の可能性を具体的に挙げることもできたとも考えられるので、ICTそのものの研究よりも、ICTを使った教科等の研究に特化することも考えられる。

展望としては、区や学校の予算や規模の問題もあるだろうが、どの学校もICT環境の整備が、より高度化した情報社会にいる児童にとって、学習効果を上げるものになっていくだろう。

7. おわりに

校内にあっても、なかなか使われることの無かった本研究助成で購入した物以外の機器でも、若手教員がその意欲をもち、実際の授業場面での使用を提案してきた。本文章を作成しているのはICTリーダーであるが、本研究が教員の意識を変えることにつながったことはとても嬉しく感じている。具体的な活用法などについてはもっ

と研修会等を開くことが必要であったという反省点はあるものの、若手教員にとっての一つの大きな進歩であった。ICT機器の活用に対する抵抗感こそ、もしかすると、どの区どの学校でも払拭すべき課題として残っているのではないだろうか。ICTの活用は、一つの授業力ととらえたい。

